



図-16-14 薬剤散布によるゼニゴケの枯死状況  
(キレダー水和剤 500 倍液散布)

## 14 その他

### (1) 乾燥 (被害)

スプリンクラー等による自動灌水では、トレイの置き場所や、コンテナ苗の生育状況（成長）によって、散水量が少ない、または散水されていないエリアが生じます。このため、トレイ自体が乾いて、以下のようにコンテナ苗が枯死する例もみられます（図-17-1）。



図-17-1 水分（散水）不足による枯死

凡例：左側：少花粉スギ（直接播種） 右側：少花粉ヒノキ（直接播種）

### (対策)

灌水時、トレイ全体にうまく散水されているかどうか、目視で確認するとともに、散水されていない場合には、手散水でも対応できるように、環境を整えておくことが大切です。

## (2) 過 湿

### (被 害)

スプリンクラー等による自動灌水では、苗の生育ステージ（季節）により、散水量を調整していく必要があります。特に稚苗段階では、散水過多の場合、コンテナ苗が過湿により枯死する例もみられます（図-17-2）。



図-17-2 水分（散水）過多による枯死

凡例：左側：少花粉スギ（播種） 右側：枯死個体

### (対 策)

培地が乾いた時点で散水を実施、または実施しない期間（日、時間）を設ける等の工夫を行います。場合によっては、トレイ重量をチェックし、散水の有無を決定します（前掲 図-9-1）。

## (3) 雪 害

### (被 害)

下図は、コンテナ苗の積雪状況です。一時的に雪の被圧による苗木の湾曲が発生します（図-17-3）。

### (対 策)

針葉に積雪が固着しているため、雪を取り除くと、苗木に損傷を与えるので、融雪を待ちます。苗木の湾曲も、融雪から1ヶ月程度経過すると直立に回復します。



図-17-3 積雪によるコンテナ苗の被圧

#### (4) 薬害等

##### (被 害)

薬剤散布後、少花粉スギ及びヒノキコンテナ苗の葉先端部が茶色、または白色に変色し、被害が大きい場合、樹勢の低下を招きます（図-17-4、-17-5）。

##### (対 策)

希釈して使用する農薬は、気温の上昇に伴って濃縮が起こり、薬害が発生しやすくなります。そのため、かん水直後を避けたうえで、気温が低い早朝から午前中の風が無い時間帯に、動力噴霧器等で均一に拡散させながら散布してください。特に、軟弱な幼苗に被害が発生する場合がありますため、初めて使用する農薬には注意してください。



図-17-4 薬害によるヒノキコンテナ苗の樹勢低下事例  
(虫害対策用の薬剤使用)



図-17-5 薬害によるヒノキコンテナの樹勢低下事例  
(蘚苔類繁殖対策用の薬剤使用)